

## 豆太郎

太郎さんはお豆が大好き、いつもお豆をポリポリ、ポリポリ食べています。それでとうとう自分でお豆を育てることにしました。家の裏の畑を耕して、お豆の種をまきました。

「だいじなお豆！ひとつ、ふた一つ」とまきながら、「ぼくの大好きなお豆がたくさん出来るぞ！早く大きくなーれ。」と言いました。まきおわるとお豆の種にお水をたっぷりあげました。その日の夜、太郎さんはお豆の芽が出るのを楽しみにして寝ました。

太郎さんは、明くる日、朝起きると直ぐに「ぼくのお豆どうしたかな？もう芽が出たかな、」そうつぶやきながら、裏の畑に出てみました。すると、まあどうしたことでしょう。裏の畑には、こんな大きな穴が、一つ・二つ、三つ・四つ、いくつもあいています。

「わああ、なんだろう？ぼくのお豆どうしたろう？」「ぼくのお豆、あるかな」「ぼくのお豆あるかな」と太郎さんは、畑にまいたお豆の種をいっしょうけんめい探しましたが、きのうまいたお豆の種は一粒も見当たりません。太郎さんはとうとう泣き出してしまいました。

「えーん、えーんぼくのお豆がないよー。ぼくのお豆がないようー」  
そこでもう一度お豆の種をまくことにしました。「ぼくの大好きなお豆、早く大きくなーれ、ぼくのお豆、早く大きくなーれ」そう言いながらひとつづひとつづいていねいにまきました。まきおわると、きのうのようにお水をたっぷりあげました。

「よーし、今夜はお豆をとられないように、見張っていよう。」そう考えた太郎さんは、夜になると畑の角の物陰にかくれてずっと見張っていました。

やがて、時計が真夜中の12時をチーン・チーンと知らせると、太郎さんの畑の空に大きな灰色の雲があらわれました。「あれ！お空に雲があらわれたぞ。」太郎さんはびっくりしてその雲を見上げました。雲は、お空でふわーり、ふわーり、そしてお空の雲はだんだん畑の上にゆらーりゆらーりと降りて来て、とうとう畑につきました。

「なんだ、なんだ、」太郎さんが目を皿のようにして見ていると、やがて雲が二つにわかれて中から出てきたのは、大きな大きなゾウさんでした。長いお鼻をぶらんぶらんさせています。太郎さんはもうびっくり、目だけがぐるぐる回りました。

雲から降りたゾウさんは長いお鼻を上手に使ってぱくり、ぱくり。太郎さんがまいた

大好きなお豆の種を土の中からほじくりだして、ぱくり、ぱくりとおいしそうに食べました。

「あっ、ぼくのお豆を食べているー」気がついた太郎さんは「だめ・だめ、ぼくのお豆食べてはだめ！」と大きな声でゾウさんに言いましたが、ゾウさんはそんな太郎さんの叫び声などしらんぷり、太郎さんがまいたお豆を全部食べると、長いお鼻を空に向けて、ぴゅーと霧を吹きました。

霧はふんわり雲になってゾウさんを包むと、ゆらーり、ゆらーりと風船のようにお空に上がり始めました。「ああゾウさんがいなくなる。ぼくのお豆返せー、ゾウさんぼくのお好きなお豆を返せー！」太郎さんは叫びました。

そして、太郎さんがふと見ると、雲からゾウさんのシッポがひものように垂れ下がっているではありませんか。「ゾウさん待て！」太郎さんは夢中でそのシッポに飛びつきました。でもゾウさんは太郎さんのことなど気付くようすがありません。太郎さんはゾウさんのシッポをしっかりとつかんでいたのも、ゾウさんの雲といっしょに、ゆらりゆらりとお空に上がって行きました。シッポにしがみついた太郎さんはゆらりゆらりとゆられながら夢中で「ゾウさんぼくのお好きなお豆を返せ！返してちょうだい！」と叫んでいました。

しばらくして、ふと気付いた太郎さんは下を見てびっくりしました。太郎さんのおうちが小さく小さくなっているのです。「わあー、おうちがあんなに小さくなっちゃった。ゾウさんストップ・ストップ、ぼくおうちへ帰りたいよう」でもゆらーりゆらーりゾウさん雲は太郎をぶら下げたままどんどんお空へ上がって行きます。

「どうしよう、どうしよう」太郎さんはしばらくゾウさんのシッポにしがみついてゆらーりゆらーりゆられていました。「わあい、どこまで上がるんだろう。だんだん手がしびれてきたよう、おろしてよう、」太郎さんはだんだん泣き声になりました。でも、落ちたらお空からまさかさま、かたい地面に落ちたら命がありません。

いっしょけんめいゾウさんのシッポにしがみついてゆられていましたが、そのうちもう手の力がなくなってきました。「わあ、もうだめだ」ぶらさがっていた太郎さんはたまたま両手を離してしまいました。

「うわああ」太郎さんは思わず目をつぶりました。ストーン！「おや、ここはどこだ。」目を開くとあたり一面真っ白です。それにまわりじゅうがなにかふわふわとしています。

「あれ！」太郎さんはかたい地面ではなく、ふわふわの雲の上に落ちたのでした。「や

れやれ助かった。どうやら雲の上だぞ。でもここからどうしたらおうちへかえれるかなあ」太郎さんは、また淋しくなりました。

その時です。「えーんえーん痛いよう、痛いよう。たすけてようー」と誰かが泣いている声がしました。「あれ！誰か泣いているぞ」太郎さんは泣き声のするほうへ行ってみることにしました。雲の上はなんと歩きにくいことが、一步一步足がふわふわ雲にもぐるのです。やれやれたいへんだ、よいしょ、よいしょ、太郎さんが泣き声の方に歩いて行くと、「痛いよう、痛いよう」と泣いているのは雷さまでした。

鬼のような顔で、頭には二本の角が生えています。裸に虎の皮のパンツをはいて、背中にはごろごろ太鼓を背負っています。「あれ！泣いているのは雷さまだぞ、どうしたのかなあ、けがでもしたのかなあ」

そこで太郎さんは雷さまに近づいて「雷さま！雷さま！えーんえーん泣いてどうしたのですか？けがでもしたの、それともおなかが痛いのか？」と聞いてみました。

「えーんえーん歯が痛いんだよ、痛いよう、痛いよう、助けてくれーえ」

「よーし、ぼくが歯を見て上げよう、お口をうーんと大きく開けて、そうそう歯が良く見えるようにしてくださいな」

「あーん、痛いよう、口をあけたよー」

「どれどれ」

太郎さんは雷さまのお口に顔を近づけました。

「わあ、くさい！雷さまのお口くさい。歯を磨がいていないでしょう！くさいくさい、」

鼻をつまみながら太郎さんは雷さまのお口の中を見ました。すると歯の間に大きな食べかすがつまっていました。

「あっ、痛い原因はこれだな。雷さま今直してあげますよ。でも、わあくさい、くさい」

「えーんえーん、痛いよう……」雷さまは泣いています。

「どーれ、これが痛いところでしょ」

「いたたた、痛いよう！早く直してくれー！」

「はいはい、そらとれた。」太郎さんは雷さまの歯にはさまった食べかすをばいととってあげました。

「ほーら、いたくなくなったでしょ、これからは歯をよく磨いてくださいな」

「やあ、ほんとだ、もう痛くない、痛くない」雷さまは大喜びです。

「ありがとう、ありがとう。あれえ！君だあれ？お空ではあまり見掛けない人だけど、どこから来たの？」

そこで太郎さんは、どうして雲の上にいるのかを雷さまにお話して、「雷さま、ぼくおうちへ帰りたいのだけど、どうしたら帰れるかなあ」と聞きました。

雷さまは「なあーんだ、そうなの、そんなこと簡単だよ、痛い歯を治してくれたお礼に教えて上げよう。そこの雲にお窓があるだろ、ぼくがごろごろ太鼓を鳴らすと、そのお窓からピッカリ稲光が出るから、その稲光を滑り台にして滑っていくとおうちへ帰れるよ」と言って、背中のごろごろ太鼓を打ち鳴らし始めました。

ごろごろ小さく鳴らしていた太鼓の音がやがて力強くごろごろ、ごろごろと鳴り出すと、お窓からピカリ稲光が出ました。お窓から下を見ると、太郎さんの畑が見えました。「わあい、ぼくの畑だ。帰ったらまた大好きなお豆をまこう」太郎さんは雷さまの稲光を滑り台にして、おうちの畑に向かって滑って行きました。

「雷さま、さようなら、毎日歯を良く磨くんですよ。さようなら！」雷さまは、うれしそうにごろごろ太鼓を景気よくなんどもなんどもごろごろと鳴らしました。おわり。